

# 民俗学的に見た年末年始の習俗

和田 謙 寿

一

特別な場合を除きわれわれの周囲にある習俗というものは、一対的なものとして成り立っているのが常である。仏教習俗としての祖霊信仰や彼岸行事等の場合も然りである。日本では祖霊信仰の行事も年に二度にわたり行われている。第一回は年の暮から正月にかけてのことであり、第二回は七月の中頃から八月中旬にかけてのことである。第一回に関連する祖霊崇拜の習俗は正月をもとにした十二月の中旬、つまり十二月十三日の松迎えをはじめとして大晦日から正月にかけての歳徳神にからむところの諸行事であるが、第二の祖霊崇拜の習俗は盂蘭盆の行事を中心とした餓鬼説話にからむところの諸行事であった。それ故両者には非常に似通った習俗が展開され、一般大衆はその中に一時をすごしたのであった。暮の「すすはき」に対して七月または八月の盆前に行われる「道具ばらい・すすばらい」の清掃、いずれも正月神や先祖

様を迎えるための清掃であったのである。ヤブ入りもお盆に行われたが、これはまた先祖の墓地に墓参するためのものであった。暮のお歳暮も盆に近い御中元のしきたりも同様に相対して行われるところの習俗で現在にまで続いている。たとえ暮と正月の習俗信仰が神的なものとなり、盆をもととした七月や八月が仏のものとなったとしても、両季節共に墓地や寺院に対してそれぞれ参詣していたのであり、現在でも尚その風習は続いている。春の七草、秋の七草（盆花）と似通った風習もまだまだ存在している。このような事々を更に考察して行くと、日本仏教そのものが斯かる雰囲気のもとに生じたことが、よくわかってくる。四季、つまり春・夏・秋・冬のハッキリとした国家は、世界的に見て日本以外には存在しない。仏教の発生した印度をはじめとして、泰国・中国などの国々も四季の変化に乏しい地方故、彼岸という言葉は存在するものゝ、日本のような彼岸という習俗はない。日本より盆や彼岸、葬送、それに関連した暮と正月などの習俗を除く

てしまったならば、俗にいう日本仏教はなくなってしまふ。このような事々を考えて行くと、例え正月の祖霊習俗の行事が神的な立場に移向したとはいえ、日本仏教を考察して行くためには、どうしても知り得なければならぬところの重要な課題となるのである。

## 二

日本の正月は諸外国の正月に比して一番身近な貴き日として迎えられている。万事の始まりという意味では同様な立場を含んでいるかも知れぬが、更に年神（歳徳神）が訪れて多くの人たちに幸福を与えるという点では強い特色を所持している。その中心はあくまでも農耕社会、とくに水稲豊作に目標が置かれているところに意義がある。その歳徳神の降臨する場所が門松である。この木に正月神が宿るものと考えられていた。採るに先立って樹下で祭りを行い、餅や洗米を供え酒を与えることもあった。そのため神の宿るべき門松には注連繩<sup>めなわ</sup>を張ることを必要とされた。正月神は元旦を待たず暮に山から訪れるものと考えられていたのである。門松に対する考察は古来より数多く存在し非常に煩瑣なものがあつた。本朝無題詩惟宗孝者の自註に、「近来世俗以<sup>レ</sup>松挿<sup>ニ</sup>門戸<sup>一</sup>而餘以<sup>ニ</sup>賢木<sup>一</sup>換之」とあるのを始めとするが、次いで堀河院百首には修理大夫藤原顯季の除夜の歌に、「門松をいとなみ立つ

るそのほとに、春あけかたに夜や成ぬらん」とその古きことを物語っている。これより考うるに、凡そ今より八百六十年前、堀河天皇の頃に、民間行事として一般に普及していたとも考えられる。兼好法師の徒然草にも、「斯くて明け行く雲の気色、昨日に變りたりとは見えねど、引替へ珍らしき心地ぞする。大路様松立て渡して華やかにうれしげなるこそ又あわれなれ」とあり。当時戸毎に門松の立てられていたことを示している。しかし門松の現代化したのは元禄以後のことであると考えられる。門松には使用する松は昔日においては全国的に十二月十三日に山より切取るところが多く、各地で松迎への行事が行われていたのであつた。この門口に建てる松を御松様とか正月様とよぶところもある。信州<sup>(3)</sup>や土佐などで御松様というが、その木は雄松と雌松の二種で、雄の方を上または右にした。その松の根に立て掛ける三本の割木を、幸い木または、幸い様といった。（民族二巻二号）福島県南会津郡桧枝岐村では十二月十三日にお松迎えと称し、三段・五段・七段の枝を持つ松を迎えて戸口に立て、淡路島では十三日に迎えてきた松を屋根の清浄な場所に立て、これに注連繩を張り升到赤飯を入れ一晚祀り、これを「十三日正月を祀る」というところもある。現在門松<sup>(4)</sup>といえは、松または松と竹を立てると考える人が多い。しかし、門松用に使用される大きな孟宗竹は江戸時代後期に日本へ中国より伝承されたも

のであり、古くは存在しなかったのである。その後、京都付近では松に梅を加え、中国地方ではフクラシの木を、伊勢の度会地方や愛知県北設郡の門神様は主として榊を立てたといわれている。先述の無題詩の中には賢水とあり、古くは榊の用いられたことを語っている。降臨する神々の依代は日本の古俗を考えた場合、必ずしも松の木のみとは考えられなかったのである。鳥海山や月山付近の村々でも、カドバヤシ・カドマツタテといつて、榿や椿・朴・みずき等を山よりとつて立てたといわれている。阿河波勝浦郡多家良などでは笹を立てる。また榿の木を立てるところもあり、中には榿と栗とを左右に立てる地方もあり、これらを「九里四方貸しまわる」などと語呂合わせしているところもある。一般にその多くは縁起をかつぎ、このような場合常緑樹を使用していたものと考えられる。山口県の北部や宮崎県の山間部でも松以外の樹木を門木として使用している。松は祭木の略といわれているが、数ある常緑樹の中でも、松は千歳を契るとか千歳の齡とかいわれて、千年の霜雪に堪えてよく緑みさほの色を保つから、すべてお芽出たい木として用いられる。或る故実として、左に男松、右に女松を立てるのは、伊弉諾・伊弉冊の二神をあらわし、竹は国立尊に象るといわれている。榊も、もともと常緑樹を総称したものであったといわれているが、賢木・龍眼木・栄樹などの文字であらわされている。

後世になって、ツバキ科サカキ属に限られるようになったといわれている。いわば仏教でよく用いられる櫛的しきびなものであり、神事の中に多く用いられている。この点から察して門松の以前に正月神の依り所として多く用いられていた事も意義あることである。梅を門松に添えて用いられているところがあるというが、芽出たき季節の花として、更に霜雪に堪えて咲くことの出来る花であるからして、世の苦しみに屈することなく良く育つ特性を持ち、わが身わが家の発展を願う意味からも正月に当り、幸福を願う期待が含まれ用いられるのである。竹も丈たけまたは長ながに通じ、高たかの語音を含む縁起のよきものとして考えられる。『一年に長じて堅きこと木に勝る。直きこと並ぶものなし。木より末まで筋をたがえず。枝葉正しく、間の節は月の満ち欠けによって上下となる。十五日。晦みそか、朔日ついでちは平なり。茶人杓を切るにこれを案す。また枝を以って陰陽を分つ。植るにも東西に陰陽を向わせぬれば生々す。陰陽を見分くるは、初の枝の一本が陽なり。男なり。二本が陰なり。女なり。大小によって節の配り正しく、これを「ほどよい」という。』竹は松と共に色を変えない。斯かる意をもって松と共に竹を添え門松として迎えるとしている。江戸の初期の頃までは門松は必ずしも門前に飾られているとは限らなかった。もともと門松が年神の宿り給う木であるならば門前になくともよいはずである。室町以降の門松に関

する文献には、庭や広場に立てられている例がしばしば見受けられる。しかも一本立てられていた場合も多く、江戸の中期以後になるに及んで家の門に立てられるようになる、一対となるべく存在価値が上昇し、現在の如くなったと考えられる。門松が画かれている一番古い絵画は、室町時代末期の洛中洛外の屏風といわれているが、それに出てくる門松は庭に門松が立っている。当時門は建物の前の庭の干し場であったといわれ、その干し場の真中に松を一本立て、神を迎えたのである。江戸時の中期になると門松は庭から門に移動し、現在の如く入口に立てられ一対になったということである。

世の中には不思議な事も間々あることだ。一般の人たちが正月だからとって門松を立てるにもかゝらず、立てない人、立てない地方もあるという。その第一の地方が房総半島の西海岸、東京湾に面した姉ヶ崎の海岸、古来門松を立てず代りに柳と竹を立てた。それは、氏神である姉ヶ崎神社が松を嫌った為であるという。昭和三年の報告であるが、社の境内には松が一本もないばかりか、氏子も神意察して一切今松材を使用しない慣行があるといわれている。……文献上なので現在はわからない。……埼玉県大里郡妻沼の聖天様も松嫌い有名、ここでも古来松を植えず松薪を用いずとあり、四国の阿波山中の祖谷地方でも門松の代りに檜を立てると、藤原為伊氏が伝説を掲げ印されている。この種の話は忌を伝えてい

る日本の各地にはまだまだ存在するものと考えられるが、門松を立てぬ行為のみでなく、餅を搗かぬ家庭や注連縄を用いない家々の事にも考えられる。その原因・動機となる諸問題は種々あるが、祖先たちのすごしてきたところの異常な生活と、その行為、周囲の事情、物忌を守られなかった為に受ける罰やそれに関連する信仰の所在など、正月行事に暗い影を与えると思われる事々が、その中心を占めている。

わが国の仏教<sup>(9)</sup>においても、他力的立場に立つ浄土真宗においては門松を立てることに對し批判的な立場をとっている者もいる。「百通切紙」に例を挙げ、「世人松を立つる故は、千年の霊木にて青色鮮かなり。故に年の始、松にあやかる為立てるなり。当流は浄土を乞求むるが故に門松を立てず。」と。また「人間は出る息は入るを待たぬ習ひなり。松を立てたりとも死するに変わりなし、然るに世人、松にあやからんとするは愚痴のいたりなり。故に当流門徒にして門松を立てる人あらば、当流の安心に背く人なり」と。この書中に断固たる態度を以って臨んでいる。広い世間、周囲の事情もあり、必ずしもこのようには行かなかつたのであろう。昔日おいては十二月十三日が松迎えとて正月に飾られる松は、日本各地で十三日に伐り迎える地方が多かつた。

しかし正月の準備は次第に遅くなり、やがて二十日から二十八日の頃にまで繰り下がってしまった。門松を立てる日も

斯かる理由により二十八日すぎとなつてしまつたが、一夜飾りを避ける縁起によりその後集中したのである。門松を立て、おく期間は必ずしも一定していないが、日本の全般的には正月七日までのところが多く、所によつては正月四日・十五日までの地方もある。

### 三

晦日みそかは毎月の最終日、大晦日は一年の最終日であり独特の意義をもつ。一年のけじめをつけるために、とくに多くのことが行われる。この夜を除夜・年の夜・年越などによばれ、除夜とは一年の除かるゝ夜という意味をもち、新年を迎える準備に忙しいため年を守るといつて眠らない風習が各地にあり、「東京歳時記」には、とくに商家においては一年の総決算として夜を徹して集金にかけまわり、家々では部屋を掃除して入口には門松・シメナワを飾り、礼装して祖先の霊に酒食を供え、家内一同雇用人を含め酒食をとり、一年を無事にすごせたことを感謝し、「塩尻」にも述べている如く、この夜には追儺の行事をなしたことも記されている。また、心静かに元旦の朝を待つのが江戸時代を通してのならわしであつた。十二月を「師走しはす」と呼ぶのは新年を迎えるための準備に追われ、皆飛び廻るような忙しい生活を送るためより名付けられた名称であるといわれている。この時の食事を東北

地方では「としとり」関西では「おせち」といふ、江戸では、「そば」大阪では「むぎ飯」を食べるところの習俗があつた。

最近ではそば食の地域も広がり、「年越そば」「晦日そば」の名称で知られ、そばのように細く長く長く生きることが願つたものであるといわれている。昔日、年籠としごもりという習俗があつたが、今もなおこの慣習は行われて神社や寺院などへの参拝がなされている。滑稽雑誌(11)に「和俗大晦日の夜、霊仏霊社へ詣で年をとるなり。これを年籠という。諸国にある事にてその国郡の神社仏閣などへこもることなり。京都にては伊勢、熊野などへ、近くに祇園・清水きよみず・愛宕あたご・八幡はちまなどへこもるなり。」と出ている。この世は神社仏閣などで煩惱解脱・罪業消滅。つまり、煩や悩などのことごとをなくし、人々が知らず知らずの間に犯した罪やけがれをきよめるための大祓の儀式が行われ、これを年籠といつて一家の主人が家族を代表して、神社仏閣にこもつたのである。とくに寺院を中心としてこの夜は法会が厳修されたのである。この過ぎ去つたところの一年を反省して、来るべき年の幸福を願つて百八の除夜の鐘をついた。各寺院で法会を終了した後、百八の除夜の鐘がつかれるのであるが、俗に民衆の間に行われている百八つの鐘は、百八の煩惱を流すためのものといわれている。その内容については昔日より種々の説がある。

「心を纏縛して善を修するのを妨げる無慚(自省して自ら造った罪を恥じざる心)・無愧(無慚が人に対して、無愧は天に対して恥じざる心)・嫉(ねたみ)・慳(もの吝み)・悔(くやみ)・睡眠・掉拳(心が騒いで落着かない)・昏沈(心身が沈みこむ)・忿(いかり)・覆(自らの過ちをおおいかくす)の十纏と、煩惱の異名で衆生を迷いの境界に結縛するという意味での九十八結を加えて百八とする説、感覚と心の六根(眼・耳・鼻・舌・身・意)と、それによって感覚され思慮される対象である六塵(色・声・香・味・触・法)とが対するとき、好・悪・平(好でもなく悪でもない)の三つがあつて十八となり、それぞれに染・浄の二つがあるから三十六。そしてそれぞれに過去・現在・未来の三種があるのて合して百八となるという説、六根に苦・楽・捨の三受(心の働き)があつて十八、また、好・悪・平の三種があつて十八、合して三十六となり、これに過去・現在・未来の三つを乗じて百八とする説もある。また、百八の数は一年を意味するものといわれ、「類聚名物考」第三百三十四に、「宋洪邁俗考に、鐘声一百八鐘は以て十二月・二十四氣・七十二候に應ず」と記している。―すべて引用・註参考―除夜には寺々から鐘をつき出す。最後の鐘を新年の第一点につき、旧年中に百七点、合わせて百八の鐘になるといわれる。鐘楼に登る時はまだ今年、すなわち旧年であり、撞き終つて下りる時

は正に新年になるという。

盆と正月との行事にはもともと深い関連がある。精霊の送迎中の行事にも除夜の鐘と関係あると思われる百八の数があつり、一般民衆との間に深い関係のあつたことが意義あるものとして考えられる。更にまた、松迎への十二月十三日の行事も七月上旬から中旬初頭にかけての盆との関連が、何か興味を引くところがある。「盆花を山へ取りに行く日は七月十一日が多い。信州では同日を盆の花とり日としており、丹波の一部でも十一日または十二日に山へ花切に行く。この十一日の盆花迎へは正月の若木迎へと対比することが出来る。

正月様が若木と共に来られるとの考えと、精霊が山の花と共に臨まれるとする考え方は一致する。……北津軽の小泊の地方では七月七日に盆花迎へをしておいて、十三日になって祭壇に供える。正月の若木を先に迎へておいて十三日になって門松を立てる信州下伊那地方の場合と良く似ている。……越後の岩船郡地方の一部では、十三日の夕刻迎え火を焼く。これは家の前で松のしでを焼くのであるが、仏壇の前でも河原の石を敷いてその上でもやす。……ところが、送迎を部落共同の形で行うところがある。盆の十三日の迎え火は山の上で集つて焼き、百八の松明をとます。村ではこの日を見て家々の軒先に藁の松明を焼く(相模足柄上郡高根山麓)十四日(迎え)と十五日(送り)の夕方、二夜続けて山の上で松明

を燃やす。或は駿河富士では十六日の精霊送りに海辺に集って松明をとますが、これを百ハットという。信州の百八炬火は新盆の家に限って行っている。十三日の夜明けに子供たちは丸山と呼ぶ小山に松明をかざして揃って登り、用意しておいたショウライ（精霊）という青竹を心として柴をつけた摺を焼く。火繩にこの火を移して各々の家に戻り仏壇の燈明を点ずる。茨城県浮島地方では十三日の夕方、部落の子供たちが村端れの辻へ干した真菰をもって迎え火をたきに行く。以上の如くその関係の深さがわかる。

毎月晦日にそばを食べる風習は全国的にあったという。とくに大晦日にそばを食べる風習は「運そば」などと云い、このほか広範囲に渡って流行っていたといわれている。そばは古来「ソバムギ」「クロムギ」といわれ、原産地はハッキリせぬが、室町時代の往来物には蕎麦と書いて「そばきり」の意に用いられていた。史上に見える始めは、続日本書紀養老六年七月、戊子の詔中に、「今夏雨無く、苗稼登らず、天下国司をして百姓に勸課し、晚禾蕎麦、及び、大小麦を種樹し、蔵置儲積以て年荒に備へしむ」とそばの性格上より来たる必要性を訓じているが、わが国では近世以降急速に広まったもので、それ以前には料理調製法を知らず、団子のようにしてそれを焼餅状にして食べていたらしい。饅飩に比して、そばは土地や気候の上よりみて不毛の土地に出来得ると

いう利点はあるも、冷え物にして不消化の憂いあれば、その伝播には種々なる問題をかゝえていたのかも知れない。

しかし江戸時代の初期に蕎麦切が現われ、「ケンドンそば切り」のもとに江戸市中に流行り、各所にそば屋が生ずるに至った。関西の人たちは元来うどん好きのため、そば屋でうどん屋を兼ねたところの商屋が出るに及んだという。わが国では大晦日のそばだけではなく、旧正月のうちう・どんをつくって近所の人たちを招待する地方もまだ存在する。細長きものには福が宿るといふ心情が残っているためである。

#### 四

文献的に「賀正」の文字の最も古いものは日本書紀の孝徳天皇「大化二年春正月、甲子朔、賀正の礼畢、即改新之詔ヲ宣リタマフ」とあるのが初めてだといわれている。

正月行事は年中行事のうちで一番重要なる行事の一つである。中心となるのは元日を中心とした大正月で七日頃までの正月を指している。大年・または男の年取りという地方もある。十五日を中心とした小正月、これを小年、または女の年取りとよんでいる。小正月の間にも種々なる類似した行為が行われ、六日の年越・七日正月などをするところもある。正月の準備は年末の二十日から二十八日頃の間に行われ、煤払い（すすはき）・餅搗き・松迎え・正月の飾り、などをす

る所が多い。小正月後の十六日から十八日頃にかけては、仏の年越・先祖の正月などを行う地方もある。十六日の藪入りのしきたりは盆の行事と共に昔日から意義あるものとされ、現在でも田舎への帰郷、列車やバスが多発されてその便を計っている。大正月の元日の朝の第一の行事は初詣である。本来はその年の恵方に当る方角の社寺に参詣することになってきたが、近年は有名な寺社に詣でるのが慣習になっている。第二は初日の出を拝む習俗である。

古今東西を問わず信仰というものは、早い速度をもって根強く各地に伝播するものである。とくに日本では古い時代より太陽崇拜は目覚ましいものがあり、天照大神の神話に事寄せた信仰には一きわ強いものがあつた。とりわけ元日の良き日はその立場が集中し、大衆の間には目出度き太陽を拝もうとする期待は意外に大きく、元旦の早朝、海岸に臨み、山頂に登って海上または地平線を上り来る太陽を迎えなが大気に勤しむ風情は今尚多くの人たちの間に残されているのである。年末には祖先神としての歳徳神が家に帰えってくるものと考えていた。そのため昔日においては各地の家庭では家を浄めるために煤掃を行い、神の来訪するのを待ちわびたのである。それ故正月一日に家の掃除をすることは来訪した神々を追い払うことになるので、どこか家庭においても固く禁じられたのである。

二日は仕事始めである。男は縄をなつて年神様に供え、女はウラジロの葉に縫いぞめをした。学童は書初かきぞめをするなど、正月の第一歩を踏み出したのである。もつとも書初は元日にする説と二日にする説など種々あるが、多くは二日に行われている場合が多い。

正月一日より三日間は家々で雑煮をもつて祝う。

正月といえは屠蘇とそがあり餅があつて雑煮が出来る。何時の頃より始められたかは正確には知り得ぬも、平安時代(13)の初期に餅・人参・大根などを神に供え神まつりをしたため、後これを集めて食べるようになったといわれている。一説には鏡餅の歴史と同じく上古以来のことであろうと考えられている。雑煮の中味は餅を中心に、副え物として一般に、芋・大根・菜・牛房・昆布・乾あわび・にんじん・豆腐等が用いられるが、塩味・醤油・味噌等で煮る。所によってはその内容も大部違い、その土地の産物を入れる場合が多い。北海道地方のサケ・筋子。かじかのだし汁を使った仙台雑煮。山の幸を豊富に使つた信州雑煮。大きな頭芋かしら芋を入れて白味噌仕立にした京雑煮。盛付けの豪勢な長崎雑煮など。各地の特色を生かした色々なものがある。雑煮はかように種々な品物を混ぜて煮るから雑煮の名称が生じたわけで、雑煮の本来の姿は、守貞漫稿によれば、「ほうぞう」と名付けられていたらしい。伊勢貞丈の説によれば、『雑煮の本名を「ほうぞう」という。



烹雑の字は公家年中行事にあり。」と述べられている。一話一言の書中には、「烹雑、生の餅へ烹たる小豆を置く、禁中に雑煮なし。今時の雑煮というは烹雑より初まるなり。」と紹介され、更に前述の守貞漫稿中には、「雑煮は五臓を保護する意にて保臚と書するなり。」とその意義を示している。

元日から七日までのこの期間を「松の内」と呼び、門には注連を飾り門松を立て、祝う。七日を一般に七日正月とよび、別名、七草・若菜節・七種節くさなどといって色々な行事をする。七草粥の故事は中国より発したものといわれ、せり・なすな（ペン・ペン・グサ）・ごぎょう（ハハコグサ）・はこべら（ハコベ）・ほとけのざ（コオニタビラコ）・すずな（カブ）・すずしろ（大根）を、はやし言葉を唱えながら刻んで粥にし、神に供えたのち家族一同で食事をした。七種の若菜を初めて禁裡で用いられたのは寛平年間の事であり、室町時代には七種粥が、江戸時代になるに及んで將軍をはじめとして武家や町家の間にも行われるようになったといわれている。もちろんそこには昔日のような厳格さは抜け、二・三種類の若菜をもって補われたという。

なづなは撫菜の義であり、いつくしみ撫でるのころである。ごぎょうは母子草で七種の時に限りオギヤウともゴギヤウともいい、俗によもぎのことである。はこべらは、ハクベラともハコベともいふ、ごぎょうと共に用うる義は明らかでない

とされていいる。ほとけのざこれも前者と同様用うる義は明らかでない。

すずなのスズは小さい義、清い義を指し、俗に唐菜とよばれている。七種の時のみスズナというすずしろと述べられている。すずしろとは清白の義であり、これは大根のことで七種の時のみスズシロというすずしろと述べている。

もともと七草粥は昔日より万病・邪気を避けるためのものとせられていたが、現代医学においても七草には薬草の効果が認められているという。すずな・すずしろはジアスターゼがあつて消化促進的な役割を持ち、はこべは植物の中では珍らしく二十四％からの蛋白質を含み栄養価値は抜群といわれている。セリは鉄分を含み増血作用を促進するという。正月オセチ料理のこの時期に栄養分のバランスを計り、胃の補強に役立つところの七草粥の斯様立場こそ、古き人たちの智慧の産物であつたのかも知れない。

正月十五日の朝、昔日においては小豆粥あづきがゆを食べるのが常であつたといわれている。粥を食べるところの原因動機としては種々あるといわれるが、粥を食べることによって一年の邪気を除き、その年の豊年を占つたという。健康と農耕農作を願う庶民たちの信仰を支えたものと考えられる。強いては正月十五日を以つて正月の祭は終了するので、最終の意を以つてそのまろやかなることを奉謝するにあつたともいわれている

る。これは小豆入りの粥で、餅は焼かずに入れてそれを煮、柔かくして砂糖をその上にかけて食べるのだというが、それを少々残して十八日に食べると一年中虫にさされることになると信じられている。これに中国の説話が加味されて、小豆は小便を利し脚気を消す妙薬なれば、邪気を払うにはこれほど良いものはないと、その効果を称えている。その起源は七種粥と共に寛平の頃だといわれている。

## 五

注連縄とは必ずしも正月にのみ使用せられるものではなく、神仏の儀礼時に用いられるものである。しかし、正月には注連飾として、文献の上では神代のむかしよりその名は残されている。神話の中に、「天照大神の天の岩戸に隠れたまひし時、手力雄命は大神を引き出したてまつりて中臣神、忌部神、しりくめ縄を其の後方にひき渡して此より内にかへりましぞと申せし此のしりくめ縄こそ今の注連縄の濫觴にて、しめはしめ結ぶの意であるといふ。」と出てくるのがそれである。浄と不浄とを区分するために神聖な区域にかけわたすところの特別な藁縄。「稲藁の新しいのをえらび、特に打たず、左ないにない、両端は切らないでおくことなどが必要で、適当な間隔に別の藁を七本・五本・三本とたらし、さらに四手(もとは木綿。今は紙で作る)をはさむ。七五三縄と

書く所以である。」……「しめ縄といふ物は左綱によりて、繩のはしをそろへぬものなり、左なひは清浄なるいはれなり、はしをそろへぬは、すなをなるころなり。」とも云っている。

注連縄の字には種々あるも、標縄・七五三縄・一五三縄・五二三縄・五五三縄・七五五縄・日御縄はいずれも、神事の神聖と清浄を保つ表象として懸けわたされたところの区画を示すところの縄である。正月の「しめかざり」に、海老・橙・昆布・交讓葉・齒朶などを付けるのは、歳徳神を迎える場所を示したものだといわれている。正月の注連縄には前述の如く縁起の良い植物や動物が付けられているが、これは昔日よりの大衆の思いがこの事々に寄せられていたのである。ここに古今の諸文献よりその内容を引用してみよう。

えびの字は、蝦・海老・海蝦・龍蝦などの文字が用いられ、川や海、湖沼などに住みその種類も至って多い。それだけに大衆に接する場も多く印象度も高い。日本では種々なるえびの中で第一の地位を占めるものは何といっても伊勢えびであろう。味や姿、大きさから考えてもこのえびの右に出るものはない。

それ故御祝儀は勿論のこと、種なる機会に重用視されている。髭長く、腰が曲る故に海老(海の老人)に当てた字が用いられる。正月これを飾り尊重するのは、えびのように髭が

長く伸びて腰の屈かがまるまでも長命であるよう願う心より生じたものだといわれているが、他方、家に老人のいることはその家は繁昌し、ますます栄える基をつくるという喜びのしるしであるとも考えられている。鯛と共に祝儀にはなくてはならぬものの一つである。かような貴重な存在物であるから種々なる効用の利のあることを昔日より知らせている。正月のえびの殻を貯えておき、疥癬かいせん（たむしの類の皮膚病）や小便閉しょうべんぎがり、氣息の急なる時、水に煎じて服用すれば妙薬になるといわれている。

## 六

橙(16)は正月飾に用いられるところの唯一なる果実の一つであり、昔日より歳徳神の注連繩の中央部に納められている。蒂へたに台が二つ付いているのでダイダイという語られているが通説ではない。橙はインド原産といわれ他の柑橘類と異なり、冬は熟して黄色くなり、春先になるとまた緑色に変わり、そのまゝ置くと数年は落ちることなく段々と大きくなる。代々大きくなって落ちることがないということから、正月に家が代々永く続くことを願って（橙 代代）の名が付けられたのであろう。一度黄色に着色した実が、また再び青に変えるので回青橙の三字をダイダイと訓よんでいるともいう。かような果実なるが故に病氣に対しても意外な効用があると信じら

民俗学的に見た年末年始の習俗（和田）

れ、正月に用いた橙の実を乾しそれを煎じて飲むと疝氣せんきの妙薬になるといわれている。正月(17)十五日ドンド焼の時橙を火中に投じ黒焼とし神棚に供えておき、薬用とする。この時焼いた橙の汁を飲むと風邪または下痢の薬となり、或はこの橙と大根おろしとを合わせて飲めば風邪の妙薬になるという。ドンドの火にて餅を黒焼にして貯えておく家もある。この火にて餅や団子を焼いて食べれば年中無病を保てるともいわれる。真偽の程はわからぬが、民間レベルにおいては信じざるを得なかつたのであろう。昆布は現代流のコブであり正月の注連飾しめなざりには是非共必要なものであった。日本での古名をヒロメといい、比呂米・廣布と当てた。別名衣比須女えびすめともよんだ。続日本紀(18)に蝦夷えびすの君等祖先以来昆布を貢献するならわしがあったのでエビスメといっているそうだが、日本古来より海草食料として用いられていた。今では正月に限らず祝儀用に用いられているが、こんぶの名称にちなんでその語音より悦んぶ、と意味を広めて使われている。

交譲葉ゆうりはと齒朶しだも正月の注連繩には大切な存在である。世諺問答には、「齒朶とゆづり葉は深山にありて雪霜にしほれぬものなれば、注連繩にかざりて同じく引侍るにや」とあり、しだは葉の裏が白いので別名裏白ともよばれている。葉が両方から相對して出ているから諸向もろむきともいわれ、また葉が羊の齒のように密生しているのでそれより羊齒しだとよぶのだともい

われている。裏白は潔白を現わす心、齒朶の字義からいうとシダの齒はよはひ、年令の義を示し朶は「えだ」「た」は「たるる」とよみ、子孫繁昌して夫婦共に栄えることを祝い願うところの意をもっているという。

神道の説によれば齒朶はもろむぎといわれ両側に向って葉の出たものであり、夫婦共に栄えることを祝い願うところの意をもっている。ゆづりははユヅルハともいい、【讓葉・樸葉・親子草などの文字を当てる。ゆづり葉はほかの木と異なり、新葉が出てから旧葉が落葉するので、その名の如く親子が代々相ゆづり合い、父子相続の円満なる家系の絶えざる立場を意味したものであり、両者共に正月の良き年を迎え縁起を祝う立場より生じたものであろう。】

七

正月に祀る神を歳徳神または年神(トシガミサン)とよんでいるが、親しさが伴ってか正月さまといっている地方もある。そのほか地方的には若年様・トシトクさんなどの名称もあるが、「とし」という語は穀物、その中心であるイネを指している古語であるといわれているから、歳神を祀る特別な棚をつくり「トシノイネ」といって稲穂を特別添える地方もある。棚壇は正月臨時につくるのを常とするが、島根半島などのように常設の年徳堂を設けている地方もある。棚には

年棚・恵方に向けるので恵方棚などの名称がついている。トシ神を迎えて収穫を感謝すると共に、新しい年の農耕生活の無事を祈り呪術的な行為が行われ、正月神の性格から推して山(18)の神の要素のあることも考えられる。山の神には農耕を司どるといふ性格があるからして、正月神と一致するところもあり、年神が稲作に関連する点が見られる。つまり、年神の性格には山の神、延いては田の神の要素がその機能の中に含まれているものと考えられる。年神は春には田に出て稲作を守り、秋には帰って正月の神になるという伝えが近畿から九州地方にかけて分布していることから、この関係が浮彫りされる。年神は作神としての性格を持ち、田神様が歳徳神様になると伝えられているところもある。俵を用い祭壇として祀るところもそのあらわれである。わが国ではもともと二回にわたって先祖の霊がやってきた。一回目は十二月の末日、つまり歳の暮である。二回目は七月中旬から八月中にかけての頃であった。前者は年の神・正月神の来訪であり、いつの間にか祖先神は神として見られるようになり、後者は盆の頃であり、いつの間にか祖先神は仏と、餓鬼的なものへと考えられるようになってしまった。歳の暮にも盆と同様に家に祖霊を祀ったことは徒然草の中にも述べられている。盆には精霊という語が使われているのに反して、暮から正月にかけてはミタマの語が用いられている。もともとミタマとは精霊の和

訓であった。年を迎える年棚と盆に用いられる盆棚とは作法もよく似ているという。たゞ後者は主として新精霊の為に經營されるようになり、その間にあって感覚の差別を生ぜざるを得なかつたのである。新たな喪に遭わぬ家の魂祭は両者共によく似ているというよりも、寧ろこれを以って彼の昔の式を推測することが出来得るのである。して時代が進み社会情勢が変るにつれて、農耕儀礼を含んだところの嘗つての正月行事は影をひそめ、近年では農耕儀礼的な行事がわずかに残るのみで、迎年祝賀を中心とした正月行事へと移り変つてきてしまつたのである。

餅を円く平たくつくつて昔の円い鏡に似せた姿をなしているために、鏡餅と名付けたようであるが、これを二た重ねにして神仏に供えることにしている。一般には飾餅とよばれている類で神饌や吉礼の重要な場所で用いられる。正月には橙や海老・干柿・昆布などゝ共に添えて飾られている。一般に食用とする餅はのし餅とするが、歳神や祖霊に供える餅や蓬菜の三宝に乗せて供える餅だけをとくに鏡餅として分けている。この鏡餅の丸餅をなるべく腰を高くして二重にし形をよくするため、皆苦心をして作ろうとしていることは、それだけの意味を要しているものと考えられる。柳田国男氏は「食物と心臓」の書（昭和十五年）のもとに、心臓をかたちどるものだと述べ、その意義を考察されている。鏡餅を別名、力

餅とか齒固めの鏡餅などとよんでいる地方もあるが、齒は生命を保持するため非常に大きなはたらきをする。齒が丈夫なことは内臓をよくして健康を左右する。よって生命力の根源となるが故斯くよんでいるのである。齒固の齒は年を意味し、年を延し齒を固める義である。鏡餅の由来には確証したものはないものゝ、延喜の頃、大嘗会（だいじょうえ）の御贄（みになへ）を近江の国火切の里から奉った記事が述べられているので、相当古い時代の頃からのものと察せられる。一説には鏡餅（20）につき、

千代までも影をならべて逢い見むと  
いわり餅（もち）のもちいざらめや

これは原忠正の歌つた鏡餅にこと寄せて恋愛の情を述べたものであるが、鏡餅は「本朝食鑑」中に八咫鏡（やたのかがみ）に似せてつくられたものだといわれている。平安朝の頃からこの儀式は重要な行事の一つになつていたといわれている。武家の間では具足を床の間に飾り、その前方に鏡餅をそなえ、海老や熨斗（し）、あわび、昆布、橙などを盛り供えたといわれている。

餅については二義の説明があり、一つは「もち」は望飯の義があり、望月の望と同意で、円るやかに足らい備える意がありといふ、二つには「もち」は満（もち）の義にして、そのさまの満ち足らいて見ゆるがためにと述べている。

鏡餅（21）の名称については昔日より神話中の八咫鏡のその例を引いているものが多いが、鏡餅の名はその形を昔の丸い金属

ばれていたのである。

鏡から取ったからだとするのが妥当性を得ていると考えられる。鏡は理想の心を写し、魂を表現する御神体であるから、鏡餅はその浄化されたところの芽出度い餅である。餅の名は、それを持って歩くところから、これを「持ちいひ」と表現されたところから始まり、昔の人たちは携帯食とし、餅は二枚かさねにして、この間におかずを狭んで現在のサンドイッチのように食べていたのだという。本来正月は年神の降臨中なのでその期間中に鏡餅を神に供えたものであり、すべての人たちが労働を休んで物忌みするための保存食として用いられたのである。正月に飾られた鏡餅は正月十一日を以って包丁を使わず手で割り砕いたのである。その頃になると鏡餅は固くなって包丁で切るのは難かしいので、そうする方法以外なかつたのであろう。切るとか砕くという言葉は縁起が悪いので開きの文字を用い、鏡びらきという名称になったのだという。昔武家の間では刃物を用いず弓の弦で引き切ったとも伝えられている。下げた餅は雑煮や雑炊として用いられたのであるが、十一日以外の日に行う地方もあり、徳川三代将軍家光が慶安四年四月二十日に他界して以来、日本各地での鏡開の日は十一日となり、それ以前二十日だったものが殆んど変更してしまったのだといわれている。鏡餅の習俗が鏡を意とする行事だけに、この日は鏡を生命とする女子にとって重要なる日なので、日本では女子のための吉日として貴

引用・参考文献

- (1) 柳田国男「旅と伝説・七年第三号」中、昭和九年三月一日、三元社発行七十二頁
- (2) A 植 路郎「日本事物起源誌」昭和十八年十二月十日、照林堂発行一五一頁  
B 矢部善三「年中事物考」昭和七年七月二十五日、素人社発行二十一頁
- (3) A 臼井秀夫「旅と伝説・七年第一号」中、昭和九年一月一日、三元社発行四十頁  
B 柳田国男「郷土研究・第六卷一号」中、昭和七年三月一日、郷土研究社発行六頁
- (4) 矢部善三「年中事物考」昭和七年七月二十五日、素人社発行二十一頁
- (5) 田所市太「郷土研究・第四卷第十号」中、大正六年三月一日、郷土研究社発行五十五頁
- (6) 樋口清之「日本風俗の起源」昭和五十一年四月一日、産報社発行一六四頁
- (7) 藤原為尹「旅と伝説・創刊号」中、昭和三年一月一日、三元社発行三十六―七頁
- (8) 折口信夫「旅と伝説第二年十一号」中、昭和四年十一月一日、三元社発行四頁
- (9) 西原芳俊「仏教事物由来伝説の研究」昭昭十四年一月二十日、顕道書院発行五三三頁
- (10) 柳田国男「旅と伝説・七年第三号」昭和九年三月一日、三元社発行七十二頁
- (11) 矢部善三「年中事物考」昭和七年七月二十五日、素人社発行三〇九・三一―一頁
- (12) 高橋文太郎「旅と伝説・第五年第一号、昭和七年一月一日、

- (13) 三元社発行四十九頁  
「日本生活歳時記」昭和四十四年十二月三十日、社会思想社発行三十九―四十頁
- (14) 加藤咄堂「日本風俗志Ⅰ」昭和十六年七月十日、大東出版社発行六十七頁
- (15) 加藤咄堂「日本風俗志Ⅰ」右同 六十五頁
- (16) 矢部善三「年中事物考」昭和七年七月二十五日、素人社発行三十一頁
- (17) 中村安孝「郷土研究・第二卷第十二号」中、昭和五十年十一月二十二日、郷土研究社発行五十六頁
- (18) 高橋文太郎「旅と伝説・第十六卷第九号」中、昭和十八年九月一日、三元社発行三頁
- (19) 和田謙寿「仏教の地域発展」平成二年三月三十日、仏教民俗研究会発行二二八頁
- (20) 「日本生活歳時記」昭和四十四年十二月三十日、社会思想社発行四十一―四十二頁
- (21) 樋口清之「日本風俗の起源」昭和五十一年四月一日、産報社発行一六六頁
- 尚この論文中、参考史料として(1)坂本太郎監修の「風俗辞典」東京堂発行。(2)藤井正雄著「仏教儀礼辞典」東京堂発行。大塚民俗学会「日本民俗事典」弘文堂発行。「日本宗教学字典」創元社発行。小学館発行の大事典。日置正一著による「ものしり字典」等を参考として用いたことを特記する。